

# ビュスティエの造形研究 —「1954年制作イヴニング・ドレスの造形研究」からの発展—

A Study of Bustier Creation:  
Developed from the Authors' Investigation of an Evening-Dress Made in 1954

安部 智子      設水 彩加      水野 真由美  
ABE, Tomoko      SHIMIZU, Ayaka      MIZUNO, Mayumi

## I はじめに

筆者らは、多くのデザイナーが「形を作る」ために工夫を凝らし、様々なクリエーションを発表した1950年代のオートクチュールの制作技術に焦点を当て、2014年よりクリスチャン・ディオールとクリストバル・バレンシアガの作品を資料とした調査を行い、その制作技術の技法研究を行ってきた<sup>1)~4)</sup>。2017年度は、ディオール社のイヴニング・ドレス（1954年制作杉野学園衣裳博物館所蔵）を資料とし、イヴニング・ドレスに内蔵されたビュスティエの制作技術の検証を行った。その結果、バストのカップ部分に切り替えない縦方向に切り替えたビュスティエのパターンであっても、バストの下端位置にボーンを入れることによって、バストと胴体部分を明確に分けるシルエットを形成することが可能となることが確認できた<sup>4)</sup>。

本研究では、ビュスティエのパターンで形成されるシルエットやラインにおいて、2017年度の研究の有効性を確認する。また、試作したビュスティエを実際に人体に着装し、インタビュー形式による着装者の視点を加えることで、制作技術の更なる検証を行うことを目的とする。

### I-1 ビュスティエ (Bustier) について

図解服飾用語事典<sup>5)</sup>において「ビュスチエ (Bustier) フランス語で、つりひものつかない、カミソール・トップに似たもの。もともとはイブニング・ドレスからリゾート・ウェアにみられたが、1976年春夏からデイトタイム・ウェアとして流行した。ニット地やシャーリングしたものなどが用いられる。」<sup>6)</sup>と定義されている。近年では服の上から着装するものなど、多種多様なビュスティエが着用されている（図1～3）。



図1 Christian Dior  
1951年春夏



図2 Christian Dior  
1952-3年秋冬



図3 Christian Dior  
2010年春夏

## II 制作技術の検証

### II-1 試作による検討箇所

2017年度の研究による検証では、縦方向に切り替えたビュスティエのパターンであっても、バスト下端位置にボーンを入れることによって、バストと胴体部分を明確に分けるシルエットを形成することが可能となるという結果を得た。この研究は、特定の個人に合わせたパターンであるが、現代の一般的に用いられるパターンとほぼ同じである。このため、今回検証に用いる試作ビュスティエは、2017年度の研究で得たパターンの形状を参考に、ドレメ式基本サイズ（バスト84cm ウエスト64cm）で作成する。

本研究では、検証1で、バスト下端位置のボーンの有無を踏まえ、縦方向に切り替えたビュスティエのシルエットとバスト下端位置で切り替えたカップ型のビュスティエのシルエットとを比較した場合、どのような違いが得られるのかを検証する。

検証2では、ボーンの有無を踏まえ、前切り替え線の脇側の曲線と直線ラインを、角を作るようにつなぐメリハリのあるラインにした場合と、縫製しやすいカーブでつなぐラインにした場合とを比較した場合、どのような違いが得られるのかを検証する。

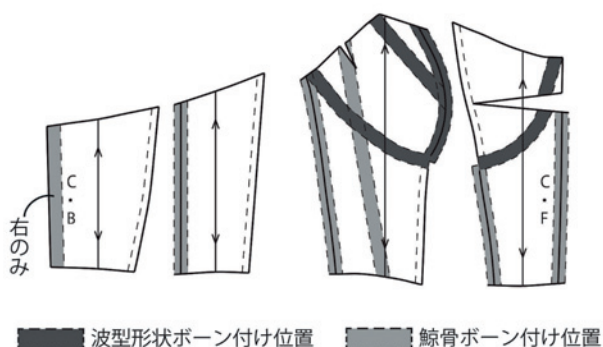


図4 2017年度の研究で取得したビュスティエパターン

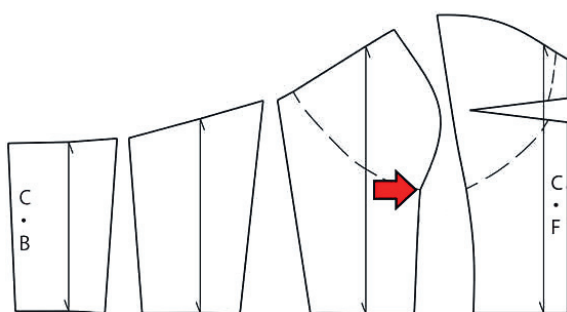


図5 基本ビュスティエパターン

### II-2 試作の制作方法

#### II-2-1) パターンについて

検証に用いた試作ビュスティエは、2017年度の研究で得たパターン（図4）の形状を参考に、ドレメ式基本サイズ（バスト84cm ウエスト64cm）で作成し、そのパターンを基本ビュスティエパターンとする（図5）。

前切り替え線、脇側ラインのバスト下端位置（図5矢印位置）で角を作るかのように曲線と直線のラインの形状を明確に分けている点が特徴である（図5）。

#### II-2-2) 使用素材について

生地：ビュスティエの試作には服飾造形においてシルエットなどの形状を確認するとき一般的に用いられるシーチング（綿）に2017年度の研究の試作同様、日東紡ダンレーヌ接着芯 Dan-Reine R222（無撚糸、経緯同じ太さの糸の平織）を貼り使用する。なお芯の接着に関しては、直線式接着プレス HP-900LF（S）を使用し、温度上下125℃、圧力0.3Mpa、接着時間15秒の条件で接着する。

使用したシーチングの基礎測定は、以下の通りである（表1）。

表1 使用シーチング基礎測定

使用箇所	密度(本/cm)		厚さ(mm)	目付け(g/m <sup>2</sup> )
	経	緯		
シーチング+R222	24	29	0.4	177.5

測定機器：マイクロメーター、分解鏡、電子デジタル天秤

ボーン：試作ではバスト下端位置に入れたボーンの有効性を確認するため、縦方向に入るボーンを使用しない。バスト下端位置には、服飾服資材として市販され

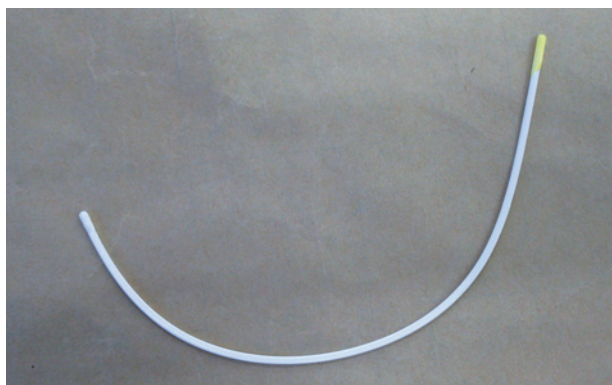


図6 ブラジャーボーン

ているブラジャーボーンを使用する（図6）。

### Ⅱ－3 結果および考察

検証結果は以下の通りである。

検証1 縦方向に切り替えたビュスティエとバスト下端位置で切り替えたカップ型のビュスティエのシルエットの比較

パターン：ドレメ式基本サイズの基本ビュスティエパターンのバスト下端位置で、カップ部分と胴体部分に切り替えたパターンを使用する（図7）。

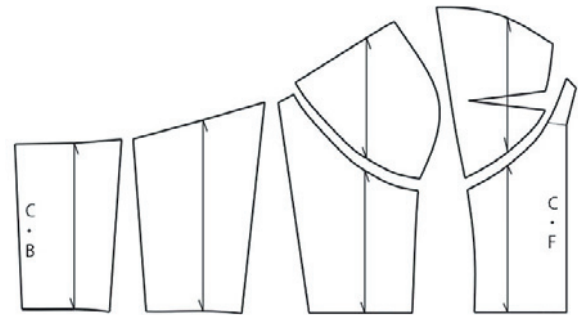


図7 バスト下端位置で切り替えたパターン

#### ① ボディ着装前 平面での比較

組み立てたビュスティエを平面上に置き、その形状の確認を行う。

##### ①－1 ボーン無しでの比較

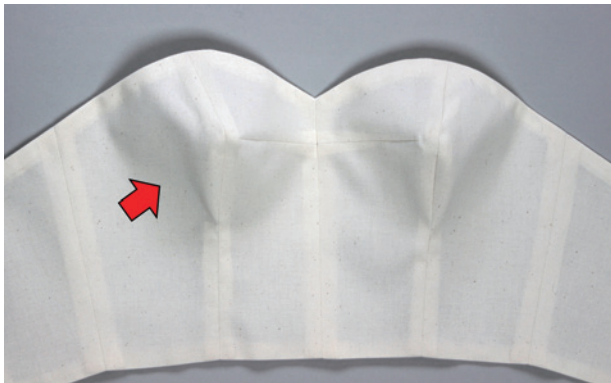


図8 基本ビュスティエ（正面）



図10 バスト下端位置で切り替えたビュスティエ（正面）

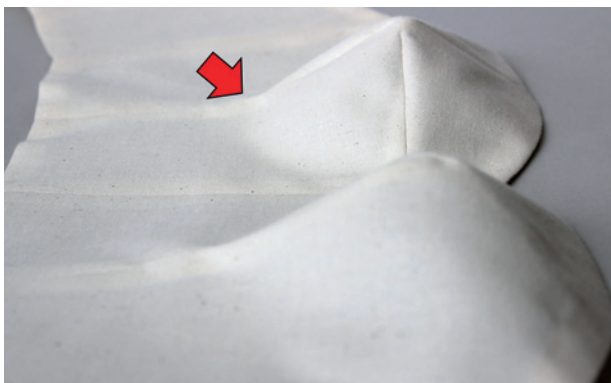


図9 基本ビュスティエ（側面）



図11 バスト下端位置で切り替えたビュスティエ（側面）

基本ビュスティエ（図8、9）：正面ではバスト部分上部は立体的な形状である。バストポイントを通る縦方向の切り替え線に沿って、バストの立体的な形状が確認できるが、切り替え線から離れたバスト下端部分にバストの丸みの形状は見られない（図8矢印位置）。側面では縦切り替え線上のバスト下端位置（図9矢印位置）で、バストの曲線が直線的な胴体部分へと変化しているのが分かる。

バスト下端位置で切り替えたビュスティエ（図10、11）：正面では立体的なバストの曲線と直線的な胴体部分の境界がバスト下端位置の切り替えにより明確化し、バスト部分から胴体部分へと形状の変化がはっきりと確認できる（図10矢印位置）。側面ではバストの丸みも安定した形状で、全体的に立体的なシルエットである。

両者を比較した場合、どちらもバスト部分上部は立



体的な形状であり、縦切り替え線上のバスト下端位置でバストの曲線が胴体部分の直線的なシルエットへと変化していることが確認できる。基本ビュスティエは縦切り替え線から離れたバスト下端部分にバストの丸みは見られない。これに対してバスト下端位置で切り替えたビュスティエの方は下端位置の切り替えによ

り、立体的なバストの曲線と直線的な胴体部分の境界が明確化することで形状の変化がはっきりと分かり、全体的に立体的なシルエットであることが確認できる。この結果、ボーン無しの場合、両者のシルエットが大きく異なることが確認できた。

#### ①ー2 ボーン有りでの比較

次に、バストの下端位置に沿ってバイアスの綿テープを付け、その中にブラジャーボーンを通し、ビュスティエの形状を確認した。

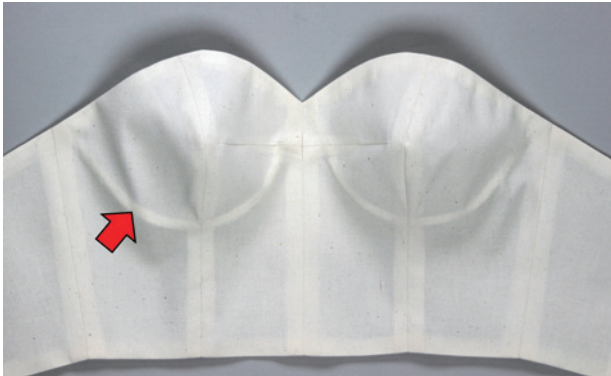


図12 基本ビュスティエ（正面）



図14 バスト下端位置で切り替えたビュスティエ（正面）



図13 基本ビュスティエ（側面）



図15 バスト下端位置で切り替えたビュスティエ（側面）

基本ビュスティエ（図12、13）：正面ではバスト下端位置にボーンが有ることで支えとなり、ボーン無しの場合には見られなかったバスト下端位置に丸みが生じた（図12矢印位置）。また、側面ではバスト部分と胴体部分の境界が明確になり、全体的に立体的なシルエットである。

バスト下端位置で切り替えたビュスティエ（図14、15）：正面ではバスト下端位置にボーンが有ることによって支えとなり、バストの輪郭がさらにはっきりした。また側面でも全体がより立体的な形状である。

両者を比較した場合、どちらもボーンが有ることで

バスト下端位置の支えとなり、バスト全体が立体的な形状である。この結果、ボーン有りの場合、バスト部分と胴体部分の境界が明確になり、両者のシルエットの差はほとんど認められない。

平面で比較した結果：ボーン無しのビュスティエのバストの形状では両者に明らかな差が確認できた。しかし、バスト下端位置にボーンが有ることにより、両者共にバストと胴体部分の境界が明確になり、バスト部分全体のシルエットがより立体的になる。この結果、ボーンが有ることにより、両者のシルエットに差はほとんど認められないということが確認できた。

## ② ボディ装着時 立体での比較

それぞれのビュスティエを SUGINO ボディに装着させ、その形状の比較を行った。

### ②-1 ボーン無しでの比較



図16 基本ビュスティエ(正面) 図17 基本ビュスティエ(側面)

図18 バスト下端位置で切り替えたビュスティエ(正面) 図19 バスト下端位置で切り替えたビュスティエ(側面)

基本ビュスティエ(図16、17)：正面では立体的なバストの形状が見られ、バスト下端位置が意識できる(図16矢印位置)が、側面ではバスト下端位置の脇側部分のバストと胴体部分の境界が曖昧である(図17矢印位置)。

バスト下端位置で切り替えたビュスティエ(図18、19)：正面ではバスト部分と胴体部分の境界がはっきりし、立体的なバストのシルエットである。側面でもバストと胴体部分の境界が明確である(図19矢印位置)。

両者を比較した場合、支えとなる身体(ボディ)があるため、平面での比較ほどシルエットに明確な差は認められない。正面で比較するとどちらも立体的な形状で、バスト下端位置が意識できる。しかし、側面を比較すると、基本ビュスティエはバスト下端位置で切り替えたビュスティエと比べてバスト下端位置の脇側部分のバストと胴体部分の境界が曖昧である。この結果、ボーン無しの場合両者の側面の形状に差があるということが確認できた。

### ②-2 ボーン有りでの比較



図20 基本ビュスティエ(正面) 図21 基本ビュスティエ(側面)

図22 バスト下端位置で切り替えたビュスティエ(正面) 図23 バスト下端位置で切り替えたビュスティエ(側面)

基本ビュスティエ(図20、21)：正面ではバスト下端位置にボーンが有ることでボーンが無い時よりバスト下端位置のバストの丸みが立体的である(図20矢印位置)。側面でもバスト部分と胴体部分の境界が明確である(図21矢印位置)。

バスト下端位置で切り替えたビュスティエ(図22、23)：正面ではバスト下端の切り替え線にボーンが有ることで、バスト下端の切り替え線位置の輪郭がさらにはっきりする(図22矢印位置)。側面でも輪郭が分かり、立体的な形状である。

両者を比較した場合、どちらもボーンが有ることでバスト下端位置の支えとなり、バスト全体が立体的な形状である。この結果、バスト部分と胴体部分の境界が明確になり、両者のシルエットの差はほとんど認められない。

ボディ装着時で比較した結果：支えとなる身体（ボディ）があるため、平面での比較ほどシルエットに明確な差は認められない。しかし、ボーン無しの場合、両者の側面の形状に違いが認められたが、ボーンが有ることで、両者ともバスト下端位置が明確になり、立体的なシルエットが得られた。この結果、両者のシルエットの差はほとんど認められないということが確認できた。

#### 検証1の結果

上記の各写真を比較すると以下のことが検証できた。

ボディ装着前平面での比較では、基本ビュスティエは、ボーン無しの場合はバスト下端部分に丸みがなく、バストの輪郭が曖昧になる。しかし、ボーンが有ることでバスト下端位置にバストと胴体部分の境界線ができ、全体的に立体的なシルエットを得ることができる。これに対して、バスト下端位置で切り替えたビュスティエは、切り替えることによりボーンの有無に関わらず立体的なシルエットを得ることができる。ボーンが無い場合は両者のバスト下端位置付近にシルエットの違いが認められるが、ボーンが有る場合は両者のシルエットの差はほとんど認められない。

また、ボディ装着時の比較では、支えとなる身体（ボディ）があるため、平面での比較ほどシルエットに明確な差は認められない。ボーンが無い場合は側面での形状に差が認められる。しかし、ボーンが有ることでバスト下端位置にバストと胴体部分の境界線ができ、全体的に立体的なシルエットが得られた。この結果、ボーンが有ることにより両者のシルエットの差はほとんど認められないという結論を得た。

#### 検証2 メリハリのあるラインの場合と縫製しやすいカーブでつながるラインの場合の比較

前述したように、基本ビュスティエのパターンの特徴は前切り替え線の脇側のラインにバスト下端位置で角を作るかのように曲線と直線のラインの形状を明確に分けることで、シルエットを明確に分けている。これはクリスチャン・ディオールの作品にみられるメリハリのあるラインをつくる上でのポイントであると考えられる。しかしながら、バストの下端位置でラインの形状を大きく変化させるため、技術が未熟な制作者に

としては、パターンを描く上でも縫製する上でもなかなか難しいラインである。現在、筆者らが授業でビュスティエの縫製を課題とする場合、前身頃縦切り替え線脇側ラインのバスト下端位置で曲線と直線の明確な境界をつくらずにカーブでつながるライン（図24矢印位置）のパターンを使用している（図24）。

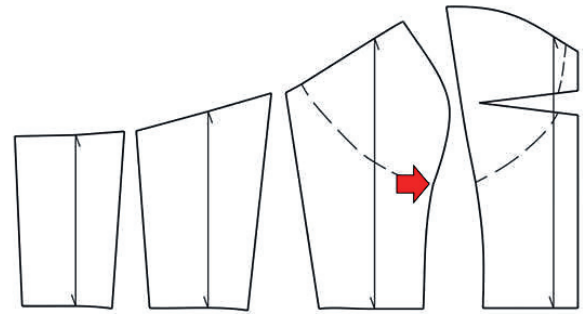


図24 カーブでつながるラインのビュスティエパターン

カーブでつながるラインのビュスティエは、基本ビュスティエに比べバスト下端位置に極端なラインの変化をつくらないことで比較的容易にパターン作成や縫製をすることが可能である。わずかなミリメートルの差であるが、この部分の違いがどのようにシルエットに影響するのかという点に注目して検証を行った。



# ① ボディ着装前 平面での比較

組み立てたビュスティエを平面に置き、その形状の確認を行った。

## ①－1 ボーン無しでの比較

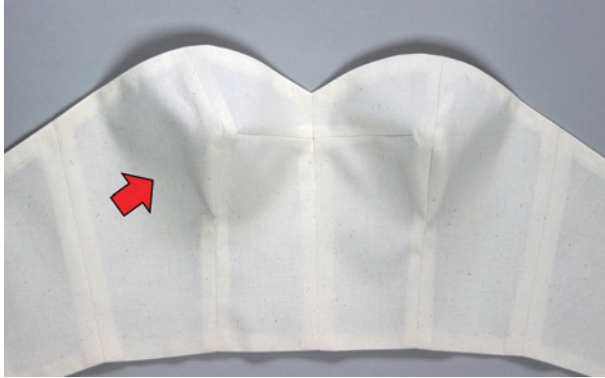


図25 基本ビュスティエ（正面）



図27 カーブでつなぐラインのビュスティエ（正面）

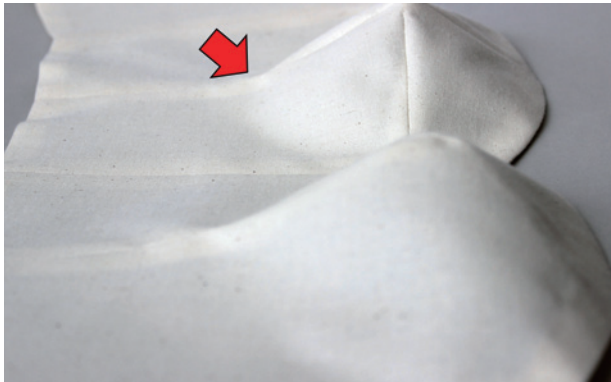


図26 基本ビュスティエ（側面）

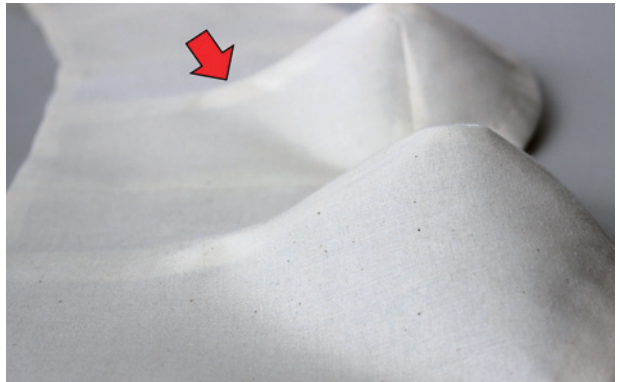


図28 カーブでつなぐラインのビュスティエ（側面）

基本ビュスティエ（図25、26）：正面ではバスト部分上部は立体的な形状である。バストポイントを通る縦方向の切り替え線に沿って、バストの立体的な形状が確認できるが、切り替え線から離れたバスト下端部分にバストの丸みの形状は見られない（図25矢印位置）。側面では縦切り替え線上のバスト下端位置（図26矢印位置）で、バストの曲線が直線的な胴体部分へとはっきりと変化するラインであることが分かる。

カーブでつなぐラインのビュスティエ（図27、28）：正面ではバスト部分上部は立体的な形状である。バストポイントを通る縦方向の切り替え線に沿って、バストの立体的な形状が確認できる。また、切り替え線から離れたバスト下端部分にバストの自然な丸みが見られる（図27矢印位置）。側面では縦切り替え線上のバスト下端位置でバストの曲線が直線的な胴体部分へなだらかにつながるパターンのライン（図28矢印位置）が意識できる。そのため、バスト下端位置が意識できず、なだらかなラインであることが分かる。

両者を比較した場合、どちらもバスト部分上部は立体的な形状である。基本ビュスティエは縦切り替え線上のバスト下端位置で、バストの曲線が直線的な胴体部分へとはっきりと変化するラインであり、バスト下端位置が意識できるが、カーブでつなぐラインのビュスティエはバストの曲線が直線的な胴体部分へなだらかにつながるラインであり、バスト下端位置が意識できないことが分かる。また、切り替え線から離れたバスト下端部分のバストの形状に違いがある。この結果、ボーン無しの場合、両者のラインが大きく異なることが確認できた。

## ①ー2 ボーン有りでの比較

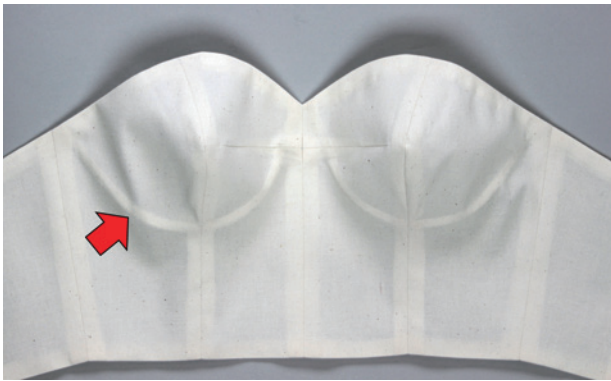


図29 基本ビュスティエ（正面）



図31 カーブでつなぐラインのビュスティエ（正面）

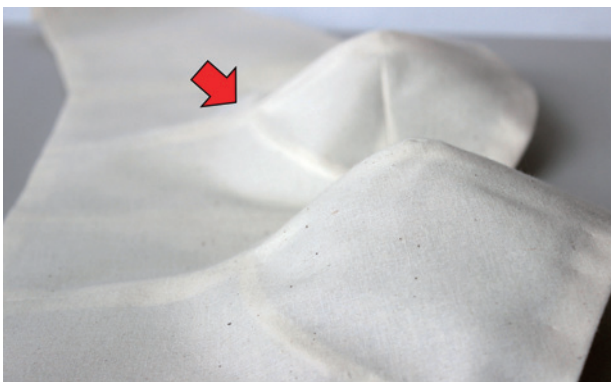


図30 基本ビュスティエ（側面）



図32 カーブでつなぐラインのビュスティエ（側面）

基本ビュスティエ（図29、30）：正面ではバスト下端位置にボーンが有ることにより、ボーン無しの場合には見られなかったバスト下端位置（図29矢印位置）に丸みが生じた位置。また、側面ではバスト部分と胴体部分の境界が明確になり、全体的に立体的なシルエットである。バスト下端位置（図30矢印位置）にボーンが有ることにより、ボーン無しの時より明確にラインの変化が見られ、メリハリのあるラインが確認できる。

カーブでつなぐラインのビュスティエ（図31、32）：正面ではバスト下端位置にボーンが有ることにより、ボーン無しでは意識できなかったバスト下端位置（図31矢印位置）が、はっきりと認識できる。側面ではボーン無しの時のなだらかなラインが変化（図32矢印位置）し、バスト部分の輪郭がはっきりとして、全体が立体的な形状でメリハリのあるラインである。

両者を比較した場合、ボーン無しのビュスティエはそれぞれのパターンを反映したラインが見られ、明らかな差が確認できた。しかし、バストの下端部分にボーンが有ることにより、ボーン無しの時よりラインが変化し、メリハリのあるラインが見られた。この結果、ボーンが有ることにより、両者のラインに差はほ

とんど認められない。

平面で比較した結果：ボーン無しではバストの曲線が直線的な胴体部分へと変化するラインに明らかな差が認められた。しかし、バストの下端位置にボーンが有ることにより、両者共にバストと胴体部分の境界が明確になり、メリハリのあるラインになる。この結果、ボーンが有ることにより、両者のラインに差はほとんど認められないということが確認できた。



## ② ボディ着装時 立体での比較

### ②-1 ボーン無しでの比較



図33 基本ビュスティエ(正面) 図34 基本ビュスティエ(側面)



図35 カーブでつなぐラインのビュスティエ(正面) 図36 カーブでつなぐラインのビュスティエ(側面)

基本ビュスティエ（図33、34）：正面では立体的なバストの形状で、バストの曲線が下端位置で直線的な胴体部分へとライン（図33矢印位置）が変化し、バスト下端位置が意識できる。側面ではバストから胴体へと変化するライン（図34矢印位置）が分かるが、バスト下端位置の脇側部分のバストと胴体部分の境界が曖昧である。

カーブでつなぐラインのビュスティエ（図35、36）：正面ではバストから胴体部分へと、バスト下端位置を意識することなく、なだらかに変化するカーブのライン（図35矢印位置）が分かる。側面ではバストから胴体へなだらかに変化するライン（図36矢印位置）が分

かるが、バスト下端位置は意識できない。またバスト下端位置の脇側部分のバストと胴体部分の境界が曖昧である。

両者を比較した場合、基本ビュスティエはバストの曲線が下端位置で直線的な胴体部分へと明確に変化するラインが見られ、バスト下端位置が意識できる。しかし、カーブでつなぐラインのビュスティエではバストが胴体部分になだらかにカーブで変化するラインが見られ、バスト下端位置は意識できない。この結果、支えとなる身体(ボディ)が有るが、ボーン無しのビュスティエはそれぞれのパターンを反映したラインが見られ、明らかにラインに差が有ることが確認できた。

### ②-2 ボーン有りでの比較



図37 基本ビュスティエ(正面) 図38 基本ビュスティエ(側面)



図39 カーブでつなぐラインのビュスティエ(正面) 図40 カーブでつなぐラインのビュスティエ(側面)

基本ビュスティエ（図37、38）：正面ではバスト下端位置にボーンが有ることでバスト部分と胴体部分の境界がはっきりとし立体的である。側面ではボーン無しの場合より下端位置（図38矢印位置）やメリハリのあ

るラインがはっきりと分かる。

カーブでつなぐラインのビュスティエ（図39、40）：正面ではバスト下端位置にボーンが有ることでバスト部分と胴体部分の境界がはっきりとし、立体的であ

る。側面ではボーンが無しの時よりバスト下端位置（図40矢印位置）が意識でき、メリハリのあるラインになっている。

両者を比較すると、どちらもバスト下端位置にボーンが有ることでバスト部分と胴体部分の境界がはっきりと意識され、ラインのメリハリが明確になる。この結果、両者のラインの差はほとんど認められない。ボディ装着時で比較した結果：支えとなる身体（ボディ）が有るため、ボーン無しの時にはそれぞれのラインに差が見られたが、ボーンが有ることで両者ともバスト下端位置が明確になる。この結果、両者のラインの差はほとんど認められないということが確認できた。

## 検証2の結果

上記の各写真を比較すると以下のことが検証できた。

ボディ装着前平面での比較では、基本ビュスティエは、ボーン無しの場合、バストの曲線が下端位置で直線的な胴体部分へと明確に変化するラインがはっきりと見られ、バスト下端位置が認識できる。ボーン有りではボーン無しの場合よりバスト下端位置のラインがはっきりと分かり、全体的にメリハリのあるラインを得ることができる。これに対して、カーブでつなぐラインのビュスティエは、縦切り替え線上のバストの曲線が直線的な胴体部分へとただらかに変化しているラインであるため、ボーン無しではバスト下端位置が意識できないが、自然な丸みが有る。しかし、ボーンが有ることでバスト下端位置が支えられ、メリハリのあるラインが見られ、全体的に立体的なシルエットを得ることができる。ボーンが無い場合は両者のバスト下端位置付近のラインに違いが認められるが、ボーンが有る場合は両者ともバスト下端位置が明確になることでメリハリのあるラインへと変化し、両者のラインの差はほとんど認められないということが確認できた。

また、ボディ装着時の比較では、支えとなる身体（ボディ）が有るためボーンが無い場合はラインに差が認められたが、ボーンが有ることで立体的なバストの曲線が下端位置で直線的な胴体部分へと明確に変化するメリハリのあるラインが見られ、両者のラインの差はほとんど認められないという結論を得た。この結果、ボーンが有ることにより両者のラインの差はほとんど認められないという結論を得た。

## Ⅲ 着装者による検証について

基本ビュスティエとバスト下端位置で切り替えた

ビュスティエ、カーブでつなぐラインのビュスティエを実際に装着してもらい写真撮影を行った。その写真を見ながら着心地や感想などを着装者に評価してもらった。

### Ⅲ-1 着装者について

試作ビュスティエの着装者は、杉野服飾大学3、4年生の女子学生（21歳8名、22歳1名）に研究目的を説明し、承諾を得た上で採寸し、トップバストとアンダーバストの差により3グループに分け、各グループ3名ずつ合計9名が装着し写真撮影を行った。

各グループの体型の特徴は以下ようになる（表2）。

表2 各グループのサイズ分布

	トップバストサイズ(cm)	トップバストサイズとアンダーバストサイズの差(cm)
Aグループ	80～82	10～12
Bグループ	77～87	13～14
Cグループ	86～87	15～17

Aグループ：バストの形状はあまり立体的ではない。

Bグループ：バストの形状は立体的である。

Cグループ：バストの形状は非常に立体的である。

### Ⅲ-2 着装用ビュスティエのパターンについて

着装者の採寸結果を元に、それぞれのサイズを用いて基本ビュスティエのパターンを作成し、その後バスト下端位置で切り替えたビュスティエ、カーブでつなぐラインのビュスティエのパターンを作成した。

トップバスト寸法とアンダーバスト寸法の差で、前切り替え線のダーツ分量は、A：3～3.5cm、B：3.5～4cm、C：4.5cmとし、ブラジャーボーンは市販されている3種類の大きさのブラジャーボーンを使用した。

Cグループは、3人のうち2名が2017年度の研究にあるようなデコルテ<sup>7)</sup>ラインのダーツを必要とした。







### Ⅲ-3 着装写真について

本人の了承を取った上で、着装者9名に試作ビュスティエを素肌に装着してもらい、正面、側面の撮影を行った。なお、本論文写真掲載に当たり、各グループの中から所属するグループの体型の特徴が分かりやすい着装者を1名ずつ選択し、改めて説明の上本人の承諾を得た。

### Ⅲ－４ 結果と考察

着装結果は以下の通りである。表の番号は、Ⅱで行った検証の試作ビュスティエの番号と同じである。







#### ①－１ 基本ビュスティエ ボーン無し

	A グループ	B グループ	C グループ
正面	 図41	 図43	 図45
側面	 図42	 図44	 図46

A グループ、B グループ、C グループともに立体的なバストのシルエットである。バストの曲線が下端位置で直線的な胴体部分へと変化するラインが分かり、

バスト下端位置が意識できる。バスト下端位置の脇側部分のバストと胴体部分の境界が曖昧である（図41～46）。

#### ①－２ 基本ビュスティエ ボーン有り







	A グループ	B グループ	C グループ
正面	 図47	 図49	 図51
側面	 図48	 図50	 図52

A グループ、B グループ、C グループともにバスト下端位置にボーンが有ることでバスト部分と胴体部分の境界がはっきりとし、全体的に立体的なシルエットである。また、バストから胴体へとメリハリのあるラ

インで変化しているのが分かる（図47～52）。









②ー１ バスト下端位置で切り替えたビュスティエ ボーン無し

	A グループ	B グループ	C グループ
正面	 図53	 図55	 図57
側面	 図54	 図56	 図58

A グループ、B グループ、C グループともにバスト下端位置に沿い切り替え線があるため、バストと胴体部分の境界が明確で、全体的に立体的なシルエットで







ある。また、バスト下端位置でバストから胴体へと明確にラインが変化しているのが分かる（図53～58）。

②ー２ バスト下端位置で切り替えたビュスティエ ボーン有り

	A グループ	B グループ	C グループ
正面	 図59	 図61	 図63
側面	 図60	 図62	 図64

A グループ、B グループ、C グループともにバスト下端切り替え位置にボーンが入ることで、バスト下端位置の輪郭がさらにはっきりし、より立体的なシルエットである。また、バストから胴体へとメリハリのあるラインで変化しているのが分かる（図59～64）。







### ③ー１ カーブでつながるラインのビュスティエ ボーン無し

	A グループ	B グループ	C グループ
正面	 図65	 図67	 図69
側面	 図66	 図68	 図70

A グループ、B グループ、C グループともに立体的なバストである。バストから胴体部分へと自然に変化するカーブのラインである。バスト下端位置は意

識できない。またバスト下端位置の脇側部分のバストと胴体部分の境界が曖昧である（図65～70）。

### ③ー２ カーブでつながるラインのビュスティエ ボーン有り

	A グループ	B グループ	C グループ
正面	 図71	 図73	 図75
側面	 図72	 図74	 図76

A グループ、B グループ、C グループともにバスト下端位置にボーンが有ることでバスト部分と胴体部分の境界がはっきりとし、立体的でメリハリのあるラインに変化している（図71～76）。

着装検証の結果から、すべてのグループでビュスティエをボディに着装した場合と同じシルエットやラインが見られることを確認できた。また、基本のビュ

スティエ、バスト下端位置で切り替えたビュスティエ、カーブでつながるラインのビュスティエであっても、バスト下端位置にボーンが有ることでバスト下端位置が明確になり、立体的なシルエットが得られ、メリハリのあるラインとなり、それぞれのシルエットやラインの差はほとんど認められないということが確認できた。

### Ⅲ-5 着装者の感想と考察

9人の着装者に、ビュスティエ着装時と着装後に撮影した着装写真を渡してインタビューを行った。その結果は以下の通りである。

回答結果は個人的な感覚であることと回答数が9名と少数であったため、答えが分散し明確な結果を得ることはできなかった。また、グループによる顕著な傾向は見られなかった。しかし、いくつかの項目に関しては、ある程度傾向を得ることができた。

・「ボーン無しのビュスティエとボーン有りビュスティエの着心地に違いがありますか」という質問に対しては、着心地に差を感じたという回答が多数であった。差を感じたと回答した中には「普段着用している下着の感覚に近いボーン入りの方がフィットしているように感じた」「ボーン入りの方が、アンダーと脇部分が支えられているという安定感があった」「ボーンが入っている方がしっかりしている気がした」という肯定的な感想が多かった。このことから、着装者は普段着用している下着の感覚に類似している点を評価していると考えられる。

・「着装者にとって着心地の良いと思うビュスティエから順番に並べて下さい」という質問に対しては、回答が分散し、着心地の良いビュスティエを絞ることはできなかった。また、「どのビュスティエもほとんど差を感じない」という回答が複数みられた。このことから、今回の検証の試作ビュスティエではパターンの差も小さいために、着心地の差はほとんど無いと考えられる。

### Ⅳ まとめ

検証の結果、以下の項目が明らかになった。

縦方向に切り替えたビュスティエにおいて、バスト下端位置に切り替えが無い基本ビュスティエは、ボーンが有ることによってビュスティエが着用者の体に密着しバストと胴体部分を明確に分け、立体的なシルエットを形成することが可能となる。バスト下端部分で切り替えたビュスティエは、ボーンの有無に関わらず立体的なバスト部分の形状が得られる。また基本ビュスティエは、バストの曲線が下端位置で直線的な胴体部分へと明確に変化することでメリハリのあるラインを有し、それはボーンが有ることによりさらに明確化する。バストの曲線と胴体部分の直線を縫製しやすいなだらかなカーブでつなぐラインのビュスティエは、バスト下端位置にボーンが有ることによってメリハリのあるラインを得ることができるという結果を得

た。

また、今回の検証の試作ビュスティエについての着装者の感想から、ボーン有りのビュスティエは、普段着用している下着の感覚に類似していることと、それぞれの試作ビュスティエの着心地に差はほとんど認められないことという着装者の傾向が得られた。

上記のことから、バストの下端位置に支えとなるボーンが有るということは、パターンをカップ型に切り替えなくても立体的なバストのシルエットを作り、なだらかなカーブでつなぐラインをメリハリのあるラインへ変化させる上で有効な造形技術であるという結論が得られた。

### Ⅴ おわりに

本研究は、1950年代パリ・オートクチュールの制作技術に着目した2017年度の研究の有効性を基本ビュスティエ、バスト下端位置で切り替えたビュスティエ、カーブでつなぐラインのビュスティエにおいて確認し、試作したビュスティエを実際に人体に装着し、着装者の視点を加えることで、「形を作る」ために必要とされる制作技術の更なる検証を行うことを目的とした。このように実際に調査・試作・検証することは、文献での知識では得られない制作技術の意味を理解し、活用することにつながるものと考えている。

ビュスティエを美しいシルエットで作ることは技術的に難しいことである。しかし、今回の造形研究は、2017年度の研究を発展させ、現在でも十分に活用することができる技術として検証することができた。この検証は、技術が未熟な制作者にとって比較的容易にそのシルエットを作り出せる方法が明らかになっただけでなく、効率的に制作を進めるうえで、有意義な制作技術であることが確認できた。今後も「形を作る」ために必要とされる制作技術を将来に受け継ぐべきものとして検証し記録する造形研究を更に進めると共に、これまでの研究により蓄積されたパリ・オートクチュールの制作技術を活かす方法の更なる可能性についても、研究課題として取り組んでいきたい。

### 謝辞

今回の着装検証にあたり、快くモデルを引き受けてくれた杉野服飾大学の学生諸氏に、心からの感謝を表します。



## 注

- 1) 安部智子 林綾美 平野紗江 森淳子, 「パリ・モードにおける服飾造形研究—1950年前後制作デイドレスの造形—」『杉野服飾大学・杉野服飾大学短期大学部紀要 vol. 13』, 2015, pp. 14—30.
- 2) 安部智子 水野真由美 森淳子 田口雅子, 「パリ・モードにおける服飾造形研究2—1959年前後制作デイ・ドレスの造形—」『杉野服飾大学・杉野服飾大学短期大学部紀要 vol. 14』, 2016, pp. 1—15.
- 3) 安部智子 水野真由美 森淳子 林綾美 平野紗江, 「パリ・モードにおける服飾造形研究3—1957年前後制作デイ・ドレスの造形—」『杉野服飾大学・杉野服飾大学短期大学部紀要 vol. 15』, 2017, pp. 1—13.
- 4) 安部智子 水野真由美 森淳子 設水彩加 平野紗江 齋藤良子, 「1954年制作イヴニング・ドレスの造形研究—ビュスティエの造形技術—」『杉野服飾大学・杉野服飾大学短期大学部紀要 vol. 16』, 2018, pp. 1—16.
- 5) 杉野芳子編, 『改定第4版 図解服飾用語事典』, 学校法人杉野学園, 1993.
- 6) 注5) に同じ, p. 80.
- 7) デコルテ (décolleté) フランス語で「衿をくった」という意味. 一般に胸, 肩, 背などを大きくくった衿あきのことをよぶ. ロー・ネックラインと同じ. カクテル・ドレスやイブニング・ドレスに多くみられる.] 注5) に同じ, p. 115.

## 図版出典

- 図1 *L'officiel 1000 Modèles No.81*, Les Éditions Jalou, France, 2008, p. 21.
- 図2 *Dior Catwalk The Collections, 1947–2017*, Yale University Press, New Heaven, 2017, p. 60.
- 図3 図2に同じ, p. 489.

## 参考文献

- ・ Claire Wilcox (Ed.), *The Golden Age of Couture Paris and London 1947–57*, V&A Publications, London, 2007.
- ・ Mark Shaw, *Dior Glamour*, Rizzoli International Publications, NY, 2013.
- ・ Patrick Demarchelier, *Dior Couture*, Rizzoli, NY,

2011.

- ・ Dior, *Images de Légende – Les Grands Photographes et Dior*, Rizzoli International Publications, Inc., NY, 2014.
- ・ Hubert Barrère et Charles-Arthur Boyer, *Corset*, Rouergue, France, 2011.